

## 建築安全に対する意識に関する研究 Study on Architecture Safety Awareness

○村田梨花子<sup>1</sup>, 八藤後猛<sup>2</sup>  
Rikako Murata<sup>1</sup>, Takeshi Yatogo<sup>2</sup>

Abstract: Japanese society, buildings, willingness to proactively prevent accidents by collecting and analyzing incident is low. Take concrete measures leading to serious accidents, tend to think the cause of the accident or human error. This is a "designer", "employer", "user" is thought to be due to the difference in value for the construction of a third party. In this study, based on the above hypothesis, "Building awareness of safety" to understand the current status of, aimed to improve safety awareness.

Through the research, set up the position of the other man was conscious and discussion. In addition, the results of the survey, "to learn that each person has different values," and found it is effective. This process concluded with an important awareness to hear the opinions of many people.

### 1. 研究目的

日本社会における, 建築物の, インシデントを収集・分析することによる未然事故防止への意欲は低い. 重大事故に至るまで具体的方策をとらない, あるいはヒューマンエラーを事故の原因と考える傾向がある. これは「設計者」, 「発注者」, 「利用者」三者の建築に対する価値観の相違に原因があると考えられる.

本研究では上記の仮説をもとに, 「建築安全に関する意識」の現状を把握し, 安全に対する意識の向上を図る.

### 2. 研究方法

日本大学理工学部建築学科 3 年生・4 年生を対象にアンケート調査を行い, 建築安全に関する意識を解明する.

### 3. 研究結果

#### 3-1. アンケート内容

建築に関する事故の事例を参照しながら回答する形式. 事例は「六本木ヒルズ森タワー回転ドア死亡事故」を参考に, 客観的事実のみを述べた内容を作成した.

下記質問項目により調査を行う.

1. 事例の事故関係者の責任の重さについて 5 段階評価. (表 1)
2. 3 つの条件を指定し, 事例の事故関係者の責任の重さについて, 条件ごとに責任の重い順から降順で 5 から 1 まで評価.

#### 3-2. アンケート調査結果

1. 事例の事故関係者の責任の重さについて 5 段階評価

結果を図 1 に示す. 一番責任が重いと考えられているのが発注した「管理者」, 次に受注したドアメーカー, 設計者, 次いで利用者の「保護者」, 「子ども」という結果になった.

保護者の, 「もともと責任は重い」が, 設計者より割合が高いのは, 「利用者の立場としての責任は軽い」が, 子どもの監督者として責任は重い」ととらえる人の割合が多いためと考えられる. また, 子どもに責任があると考えている人が 20%以上いる.

Table.1 Items out of 5

|             |             |
|-------------|-------------|
| 1 まったく責任はない | 4 責任は重い     |
| 2 責任は軽い     | 5 もともと責任は重い |
| 3 どちらともいえない |             |

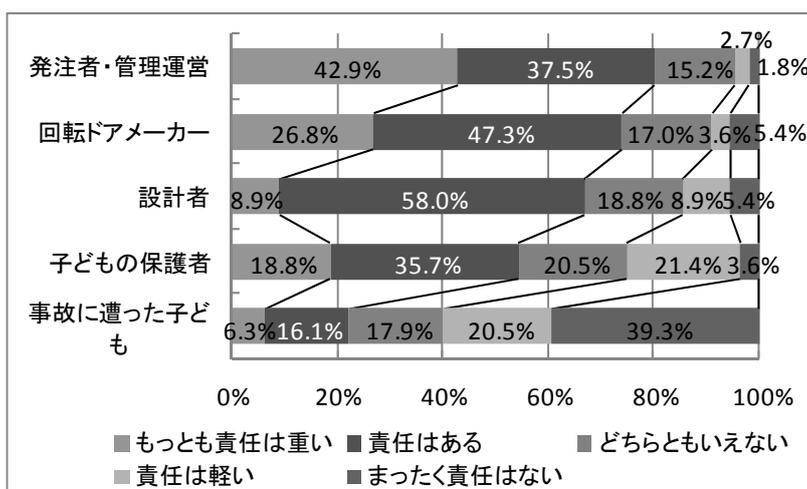


Figure.1 Out of 5 on the weight of the responsibility of the accidents involved

1 : 日大理工・院 (前) ・建築, 2 : 日大理工・教員・建築

設計者に「責任はある」が、58.0%と最も高い。対して「もっとも責任は重い」は、子どもに次いで8.9%と低い。

2. 条件による評価

条件 1「事故に遭った子どもが幼稚園生・小学生だったら」は、評価の平均において、保護者がドアメーカーや設計者と並ぶ結果になった。

条件 2「保護者が回転ドアを危険であると認識していたら」については、設計者より利用者、発注者のほうが責任は重いと考える人が多いという結果となった。

条件 3「発注者・管理運営が設計者から回転ドアの危険性を知らされていたら」は、建築学科の学生は、管理者が最も責任は重いと考える人が多い。

3. 属性による建築安全に対する意識の違い

図2に家族構成による保護者の責任の重さの評価の結果を、図3に所属コースによる保護者の責任の重さの評価の結果を示す。

所属コースによるドアメーカーの責任の重さの評価

は評価を平均し比較すると「設計・計画」は3.63、「構造・環境」は3.47とドアメーカーの責任は重いと考えている人が多い。「企画経営」は、管理者の責任が一番重い。ドアメーカーの責任は2番あるいは3番と捉えている人が多い。条件2の場合「設計・計画」コースが、条件3の場合「構造・環境」がドアメーカーの責任が一番重いとする人が多い。条件3では「構造・環境」は‘ドアメーカーが危険性を把握していた’場合、管理者よりドアメーカーの責任は重いと考えている人が多いことがわかった。

4. 考察

事例の事故関係者の責任の重さについて、子どもの責任は最もないという考え方が多い結果となったが、全体を通して、設計者、ドアメーカーよりも管理者の責任が最も重いという考える人が多かった。また、条件によっては利用者の立場である保護者の責任が最も重いという結果が出た。これは、建築学科の学生の、技術者としての建築安全に対する意識の低さを示したと考えられる。

属性による建築安全に対する意識の考察について、家族構成による保護者の責任の重さについては、兄弟姉妹がいる人や祖父母がいる人は、家族をサポートする立場でもあるため、保護者の事情を身近な問題として把握することが容易で、責任は軽いと考える傾向にあると推察する。所属コースによる保護者の責任の重さについては、構造・環境コースはハードウェアに重点を置き、設計・計画・企画経営はソフトウェアを重視という、建築に向き合う姿勢の本質的な違いに原因があると考えた。所属コースによるドアメーカーの責任の重さについては、「構造・環境」はドアメーカーに、「企画経営」は管理者に、より厳しい見解を示しているとも考えられ、その立場の持つべき責任の重さを理解した上での評価だったのでないかと推測する。

5. 参考文献

[1] 科学技術振興機構：「六本木回転ドア事故」、1-4 項、インターネット、<http://shippai.jst.go.jp/fkd/Search>

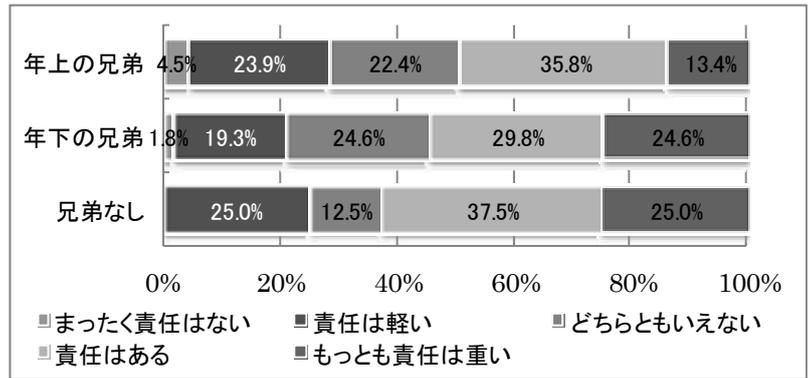


Figure.2 Evaluation of the weight of parental responsibility for the sibling

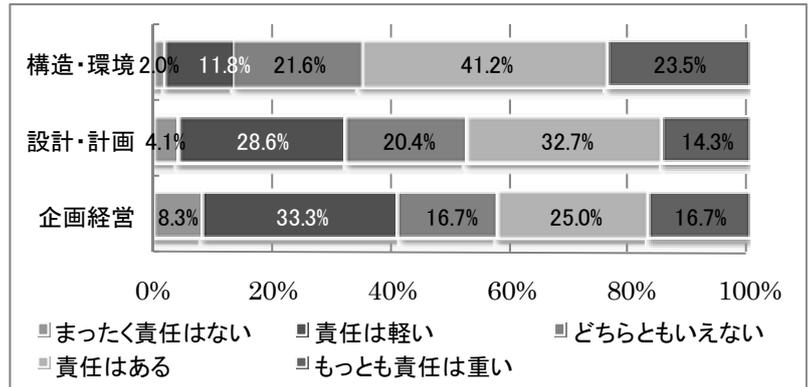


Figure.3 Evaluation of the weight of parental responsibility by a member courses